編集後記： 3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震から半年が過ぎました（本原稿は9月20日に執筆）．

私は当時，気象庁へ外勤のため，松戸駅のホームで千代田線への各駅列車を待っていました．地震の揺れが激しく，近くの柱に身を寄せたとき，鉄骨のきしむ音が聞こえていました．揺れが小さくなり，階段でホームから駅舎に上がると，天井から水が流れ落ちていました．電車の運行がストップし，タクシーも来そうにありません．国道6号線を徒歩で自宅（我孫子）に向かい，途中自転車を購入して帰宅しました．テレビには現実と思えない光景が放映されていました．

あれから半年，15,000を超える方々が亡くなられ，行方のわからない方が約4,000名，避難生活を余儀なくされている方々はなお7万4900人（9月8日現在，政府まとめ）とのこと．被災された方々の苦難と，復興までの長い長い道のりを思わずにはいられません．

本誌の編集後記で，藤部編集長（4月号）と藤谷副編集長（5月号）が過去の記録に目を向け，教訓を得ることの大切さを述べられています．仙台平野での堆積物の調査から869年に発生した貞観地震や，約2,000年前の津波が，今回の東北地方太平洋沖地震と同程度の浸水域であった可能性も指摘されています．

お二人の言葉を，私は日々の生活や仕事に対する向き合い方として受け止めました．不都合な事実には目をつぶりたくなる自分がいます．私にとっては研究業務を遂行する際，都合の悪い実験結果が出たときに，それと向き合い，原因を探ることは気が重く，忍耐が必要です．実験結果から想定されるストーリーに自分は100％納得しているのか．もしひっかかるものがあるとすればそれはなにかを追求する．防災を旨とする研究業務に従事するものとして，自戒したいと思います．

9月初めの台風第12号で，気象による巨大災害も決して過去のものではないことを学びました．正確な知識・情報の普及と，それを未来に伝えることによって，顕著な気象現象による被害を減らす役割の一端を「天気」が担えればと思っています．

（小司禎教）